

第60回応用物理学会春季学術講演会(2013年春季)

講演会企画運営委員長 宮崎 誠一*

第60回応用物理学会春季学術講演会が、2013年3月27日(水)から30日(土)まで神奈川工科大学で開催されました。2年前の東日本大震災で講演会実施を断念した会場ですが、このたびは見事に満開となった桜並木を拝める中での開催となりました。

参加登録者数は6696名(学生比率は36%)で、昨年春の学術講演会(早稲田大学)に比べて12.5%の減となりました。依然として低迷する経済情勢が影を落とした状況になりました。とはいえ、日毎の入場者数は、約4千人を越え、過密化するスケジュールにもかかわらず、多くの応用物理学会会員の皆様にご参加いただいたことを感謝いたします。

今季講演会では、17の大分類分科と2つの合同セッションに3397件の講演(うち分科内招待講演16件)がプログラムされ、口頭発表:2480件、ポスター発表:917件が47の口頭発表会場と2つのポスターセッション会場で行われました。大分類分科別に投稿件数を見ると、「12.有機分子・バイオエレクトロニクス」が481件と最も多く、これに続く「6.薄膜・表面」330件、「15.結晶工学」302件を合わせた講演件数は、全体の約1/3を占める結果です。このほかに、3つの大分類分科で200件を越える投稿件数があり、それぞれ、「4.量子エレクトロニクス」282件、「14.半導体B(探索的材料・物性・デバイス)」246件、「13.半導体A(シリコン)」212件でした。中分類分科別では、「15.4 III-V族窒化物結晶」130件を筆頭に、「6.3 酸化物エレクトロニクス」108件、「12.11 有機太陽電池」90件と続き、聴講者数で見ると、一番人気のセッションはSiC関連の講演が集まった「15.6 IV系化合物」の口頭セッション(講演会2日目)で、午前・

午後ともに近年の会合では異例ともいえる300名を越える聴講者数となり、社会情勢を反映した関心度の高さが窺えました。また、少し以前より人気のあった「15.4 III-V族窒化物結晶」の口頭発表セッションもその人気度は堅調で、ピーク時には210名を越え、4日間の会期を通して連日110名を越えるほどの盛況でした。また、以下に列挙する12の中分類分科、「3.7 近接場光学」、「6.3 酸化物エレクトロニクス」、「10.2 スピントルク・スピニ流・回路・測定技術」、「12.8 有機EL」、「12.11 有機太陽電池」、「14.3 電子デバイス・プロセス技術」、「14.4 光物性・発光デバイス」、「14.5 化合物太陽電池」、「17.1 成長技術」、「17.2 構造制御・プロセス」、「17.3 新機能探索・基礎物性評価」、「17.4 デバイス応用」の口頭セッションでも、100名を越える聴講者数となり、活発な質疑応答が交わされました。さらに、今回実施された29のシンポジウム(うち分科企画シンポジウム18件、一般無料公開の特別シンポジウム3件)では、特に講演会初日の午後に開催された「SiCパワーエレクトロニクス技術の最前線~広範な実用化を展望し、残された課題を探る~」と題したシンポジウムが、聴講者数330名に上る大変な盛況ぶりです。これも2日目の口頭セッションへの最多参加に繋がったようです。このほかにも初日午後では、特別シンポジウム「中高校の理科・技術教育の改善への取り組みと課題(科学技術立国を支える人材養成)」(現地実行委員会企画)や、「CZTS太陽電池一究極の薄膜太陽電池になりうるか」で、それぞれ230名、180名の集客となり、聴講者数100名を越えるシンポジウムが4件ありました。講演会2日目午後にも、聴講者数100名を越えるシンポジウムが2件あり、講演会3日目午後には、昨年秋季講演会に引き続いてSSDM実行委員会が企画した特別シンポジウム「国際会議SSDM:固体エレクトロニク

* 名古屋大学 大学院工学研究科



(左上) 特別シンポジウム「応用物理分野で活躍する女性達～第1回 太陽電池編～」(本部企画)。(左下) 同「国際会議 SSDM：固体エレクトロニクス研究の最前線」。(右) ポスター会場の様子。

ス研究の最前線」で、約 220 名の聴講者数となり、一部立ち見が出るほどの盛況ぶりでした。また、特別シンポジウム「応用物理分野で活躍する女性達～第1回 太陽電池編～」(本部企画)や「スピンドイナミクス、スピン輸送現象の最前線」(分科企画)も 130 名を越える集客でした。講演会開催期間中を通して、一般セッション同様にシンポジウムも充実した意見・情報交換の場となりました。

恒例となったチュートリアル(ショートコース)企画については、講演会初日の午前中に 7 件(各 3 時間)が並列に実施され、総計 235 名の聴講(有料)がありました。50 名を越える聴衆を集めた会場も複数あり、堅調に注目度が上昇しています。今後も多様なニーズに対応できるように、チュートリアル企画の充実を図りたいと考えています。

さらに、今春講演会の新企画の 1 つである“Poster Award”では、午前 1 回、午後 2 回実施されたポスターセッションにおいて、セッション毎に、優れたポスター講演 2 件を選出し、見事選出されたポスターをセッション終了後もポスター会場内の別のスペースで閲覧できるようにいたしました。そのスペースには、最終的に 18 件のポスターが並び(ポスター会場写真)、内容もさることながら、大変見栄えする状況に多くの参加者が足を止めていました。この選出にあたっては、大分類毎のプログラム編集委員による予稿審査・候補対象の絞り込み、セッション中の評価者による最終候補選考の後、本会理事、フェローおよび代議員による投票、投票結果を基に最終選考会議で即時決定されたもので、大変多くの方々の協力により質の高いポスター発表を選出することがで

きました。この Poster Award の設定を機に、ポスターセッションがより充実した情報交換の場となることを期待しています。今春講演会の 2 つ目の新企画、“JSAP Photo Contest (Science as Art)”を展示会場にて実施しました。これは、参加者の好奇心を刺激する企画として、応物会員および展示企業に呼び掛けて試行したもので、19 の作品が集まり、いずれも、芸術性を踏まえて、意外性、偶然性ありの素晴らしいワンカットで、多くの参加者の注目を集めていました。この企画では、参加者の投票により、最優秀賞 1 件、優秀賞 1 件、特別賞 2 件が選ばれました。

恒例の講演会初日の夕刻に開催される懇親会は、本厚木駅近くのレンブラントホテル厚木で開催され、小林常良厚木市長のご列席を賜る中、小宮一三神奈川工科大学学長はじめ、約 250 名の参加者で親交を深めました。

最後になりましたが、今回の講演会は、神奈川工科大学の教職員で構成された現地実行委員会による 1 年間(2011 年春季講演会への対応を含めると実に通算 4 年)にわたる準備とアルバイトの学生たちを含めての 4 日間と前日、前々日の現場での活躍のおかげで、全ての行事を滞りなく進めることができました。現地実行委員長荒井俊彦先生(神奈川工科大学 工学部)、現地実行副委員長の黄啓新先生(神奈川工科大学 創造工学部)をはじめ、現地実行委員会の諸先生には厚く感謝申し上げます。また現地実行委員会顧問として全体運営にご配慮いただきました小宮一三学長、森武昭副学長、山本圭治郎副学長をはじめとする関係者の方々に、厚く御礼申し上げます。